「あたりまえ」が人を殺すということ

八街市立八街中学校　三年　中村　さくら

「皆さんは、『あたりまえ』や『普通』という言葉を聞いたり、突きつけられたりしたときに、苦しくなったことはありますか」。そうやって聞かれたときに、ほとんどの人が「ない」と答えると思います。なぜならば、「あたりまえ」は「あたりまえ」。「普通」は「普通」。そうとしか言いようがないからです。ですが、その「普通」や「あたりまえ」は、自分以外の他人にはわからないはずです。それらは、人によって違うはずですから。

今の世の中では、小・中・高を問わず、ほとんどの学校で、よく「みんな違って、みんないい」というポスターや掲示物をよく見るのではないかと思います。私も、今は「多様性の時代」と言われますので、飾られていることには、特に疑問を持たないで生きてきました。でも、最近になって考えれば考えるほど、疑問に思うことがあるのです。それは、「あんなに『多様性』を掲げているのに、どうして周りと少しでも違うと否定されなければならないのか」、「そもそも、その『普通』や『あたりまえ』は、誰のものさしで測っていて、誰がその定義を決めているのか」ということです。芽生えたその疑問が、胸の奥から消えることはありませんでした。

私は、自分自身のことを、少なくとも「すべてが周りと一緒」と思ったことはありません。むしろ、その逆の「自分は周りと違う」と思うことの方が多くあります。私は、世間一般の人々でいう、「バイセクシュアル」という性的指向を持っています。私の体は、まごうことなき女性です。しかしながら、恋愛対象は、異性である男性だけではありません。男性が嫌いとか、好きになれないとか、そういうわけではないのですが、強く惹かれるのは、幼い頃からずっと女性で、今でもその気持ちは変わりません。

そんな自分に違和感を感じ始めたのは、小学校二年生から。明らかに「自分は周りと価値観が大きく違うのかもしれない」と感じたのは、小学六年生の修学旅行の日でした。周りの班の女子たちは他校や他班の男子に夢中になっていたのです。昼食のときにも、女子たちは好きな人や気になる人の話で盛り上がっていました。そんな話を急に振られ、迷ったけれど、勇気を出して、正直に女の子が好きだと伝えたら、「冗談言わないでよ」と笑われたのです。ショックでした。振られた話題に真剣に、勇気を出して答えたのに信じてもらえないばかりか、相手にもしてもらえませんでした。そうしてそのまま、私は複雑な心境を抱え、修学旅行を終えたのです。

ここまでだけだと、ただの経験文です。でも、私には伝えたいことがあるんです。ずっと胸に秘めてきて、言葉にもできないような、そんな伝えたいものがあるのです。男の子が好き、それはもしかしたら、女の子の中ではあたりまえのことなのかもしれません。でもあの頃の私は、そんな簡単なことも知らなかったのです。だから伝えたいのです。女の子が男の子を好きになるのはあたりまえではないということ。無知は、尊くて無垢なものではあるが、それによって周りとの違いに不安を抱く子供が、この世にはいるということを、誰でもいい、誰かに伝えたいのです。

わからないなら放っておいて、と言いたいわけではありません。「あたりまえ」も「普通」も人によって違うからこそ、決めつけてその意思を殺さず、対話をして少しずつ理解を深め、お互いを尊重できる人が増えてほしいのです。今、私が色々な人にしてほしいことは、平等や平和のポスターを掲げることではありません。色々な人と手を取り、一緒に何かをし、対話をして、お互いの「あたりまえ」や「普通」を知って理解すること、それだけなのです。人の考えは皆違う。今、この時代に必要なのは、認めることではないと私は考えています。今、本当に必要なのは、知って、理解して、興味をもつことです。子供の教育者である大人の皆さんにはわかってほしいし、子供の皆さんには手を取

って話すことの大切さを知ってほしいのです。私が望むのは、ただそれだけなのです。